

Views from Orienteering

村越 真

地図を学ぶ子ども達

小学校3年ごろから社会科で地図を使った学習が行われる。4年生になると地図自体も学習の対象となり、地図帳も配布される。実は地形図も学習対象である。大人に地形図の読み方を教える時、ゼロから教えなくても済んでいるのは、小学校での地図教育に負うところが大きい。その一方で、限られた時間の中で、子ども達の興味を高めるための指導が十分だとは言えない。

3年生の社会科の学区探検では、縮尺も手ごろなので、地図が使われやすい。私が勤務する学校では、毎年この時期になると、街の中心部にある城跡の周囲を含めた学校区の探検に出かけ、それを地図化する授業をやっている。先日、ある教室の授業を参観した。学校は城跡の東に位置し、教室は城跡の方（つまりは西）を向いている。授業が始まる前に先生はわざと地図をノースアップで黒板に貼った。

誰かが、「先生、地図の向きが違う」と言った。賛同する子どももいる。「それだと（北となりにある）附属中学校がこっちなのに、こっちになっている」というのだ。地図と実際の方向が一致していない（整置されていない）、ということなのだが、児童はなかなか的確にいいことを言葉にできない。ところが、中にはそれでいい、という子もいる。「地図は北が上じゃなきゃだめ」というのだ。地図は北を上にして使うことをどこかで習ったか聞いている。先生がこれらの発言を取り上げ、最初に貼ったままがいいのか、それとも、横にした方がいいのかと問いかける。

子どもは先生の問いかけに対して一生懸命考えている。僕が見ていた子は、隣の机の子と地図を逆向きにして比較しているが、自分の周りで実際の目標物の関係がどうなっているか、それが地図ではどうなっているかを精緻に意識できないので、結論がでない。僕らは指導の時、何気なく「地図上の目標を実際の方向に合わせてね」と言ってしまうが、自分より小さな地図の中で、位置関係を読み取るのは、大人でも意外と難しいのだ。地図読みが苦手な人にはもう少し丁寧にその作業のポイントを伝えるべきなのだろう。この問い

は、それだけでも地図利用の本質に迫るいい問いなのだが、授業の中ではそれを深める時間は十分ではない。

教育実習では、実習生が等高線の学習をするという。小学校では地図学習にそれほど時間は掛けられない。義務教育9年間で明示的に等高線が取り上げられるのは、おそらくこの1回限り、時間配当もせいぜい1時間だろう。よりもよってなんでそんな難しい教材を選んだのだ？と聞くと、難しいからやってみたかったのだという。その日はあいにく学校勤務日ではなかったが、等高線を小学生が学ぶとあっては黙ってはいられない。見学に出かける。

子どもたちと一緒に僕が作った富士山の立体模型を、彼は導入に使ってくれた。その後富士山の等高線（150mおき）が書かれたワークシートを配り、等高線を見て気づいたことを、教科書を参考にしながら記入するという実習生によくある授業だった。工夫されていたのは、アウトドア用の折りたたみカップに線を引いたものがグループに1個配られていた点だ。カップを広げれば、円錐台型、折りたたんで上から見ると地図の等高線になる。

子どもの書いたノートを巡視していて、驚いた。ある児童が、横からみた等高線（つまり水平で等間隔の線）と上からみた等高線（つまり地図の等高線）を描いて、「上からみると」「横からみると」と解説を書き付けているのだ。失礼ながら巧みとは言えない実習生の説明から、よくこの図が描けたものだ。ツボにはまった時に、子どもは予想以上の能力を見せる。

他の子どもも、配られたワークシートの等高線に、それぞれの考えで何かを書き足している。等高線間にベクトルを描き込み、間隔の変化が読み取りやすくなった子、段彩もどきをやりはじめた子、それぞれの関わり方で等高線に迫ろうとしている。それぞれが等高線に対する認識の反映であるが、児童は必ずしもそれが意味することを正確に自覚しているわけではない。様々な子どもの現れにどんな意味があるかを教室で共有したら、等高線の多様な特性が子どもの中にすんなり落ち込む

いい授業になっただろう。等高線学習の行く先は一つだが、そこに至るには様々な道があるものだ。

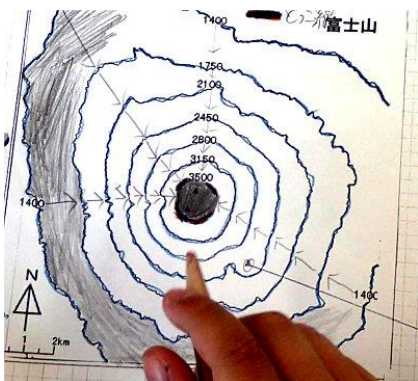
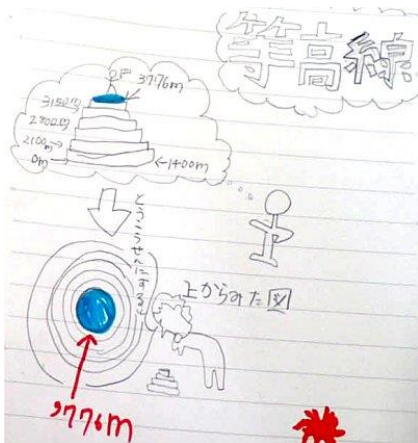
熱心なその院生が事後検（授業後に授業の展開を振り返り、良かった点やそうでない点を確認する作業）をやってくれ、と言ってきた。ビデオにとった彼の授業を振り返る。改めて振り返ってみると、子どもたちの気づきは、意外と等高線表現の本質に近づいていること、先生のもう一押しがあればそれを教室で共有できた可能性があることに気づく。彼は次回の授業へのヒントが得られて大満足だったし、僕も、等高線を教えることの多様なアプローチが見つかった。実践も重要だが、それを丁寧に振り返ることはさらに大事だと実感した。



実習生による等高線授業。地形模型と等高線図の対比から、等高線の特長を考えていく。



アウトドア用携帯カップを利用して横から見た凹凸と上から見た地図の違いを実感させる。これは使えそうな工夫だ。



児童の等高線理解のありようは多様だ。すんなり横と上の視点の違いに気づける子、等高線間隔の広狭に着目する子。指導者の適切な発問があれば、小学生が等高線表現を理解するのも、困難なことではないのかもしれない。

トレイルランニングへの バッシング

6月のある日、県庁の社会教育課からの電話があった。朝霧高原トレイルランニングレースのコースディレクターを依頼している相馬さんに対して、県の自然保護課と道路課が違法行為で摘発を行うという情報だった。相馬さんは、2007年のハセツネカップ日本山岳耐久レースの優勝者で、その後各地のレースに出場し、活躍している。2013年からは独立して、富士山麓をベースにプロのトレイルランナーとして活動している。

問題になったのは、彼が7月5日に計画している富士山のトレイルツアーだった。富士宮五合目から登山道を登り、宝永山方面に行く予定だったようだ。この行為が道路法46条に違反するといふのだ。道路法46条は、道路管理者は道路を安全や保守の理由によって通行禁止にすることができるという内容であり、罰則規定もある。しかし、登山道は「道路」なのだろうか。ウェブを調べてみると、県道152号線の終点は富士山頂であり、徒歩道と言えども、県道指定されている立派な道路だった

のだ。しかも、冬季の富士山の遭難増加に業を煮やした山梨県が、46条を根拠に冬季の富士登山の強い規制を考えているというニュースも見つかった。

この問題の是非はここでは論じないが、論点は、夏季開通期間以外にも規制がかかっている登山道に日常的に入っている登山者がいる中で、なぜピンポイントで相馬さんに摘発の警告が来たかという点だ。自然保護課の言い分は、相馬さんがツアーとして一般に募集していること、それをウェブで公にしていることだと言う。どんな規制も全ての違法行為を対象とすることは難しい。速度違反取り締まりでも、隣の車は速度超過で行ってしまったのに、自分だけが捕まるということはよくあることだ。その一方で、摘発予告を社会教育課に事前に流したということから、別の意図を感じざるを得ない。

先日は、TBSの番組で東京近郊でのトレイルランニングレースが取り上げられたが、「山の暴走族」的ステレオタイプな見方と、事実に基づかない偏向内容に対して取材対象だった主催者が抗議の意志をブログで表明するといった出来事があった。

またview45でも触れたように、鎌倉では条例制定の動きもある（これにしても、別の記事によれば、鎌倉市の姿勢は、お上目線で規制をしようというよりも関係者間の調整の努力に期待している側面が大きいようだ）。

オリエンテーリングが急激に普及した1970年代には、似たようなバッシングがオリエンテーリングに対してもあった。私も大会参加時に、「オリエンテーリングの人、帰ってください！」と大声で怒鳴られたことは今でも脳裏に残っている。今回の「摘発騒ぎ」は、自然や他人の土地を舞台にするスポーツとして、オリエンテーリングも対岸の火事とは言っていないのだ。

50年間に蓄積した知恵を、アウトドア界のために還元することも、オリエンテーリング界の使命の一つであろう。

(村越 真)